

近代日本文学の分水嶺

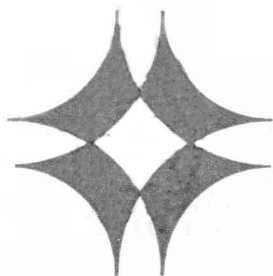
大正文学
の可能性

大西

近代日本文学の分水嶺

——大正文学の可能性——

大西 貢



国文学研究叢書

明治書院

著者略歴

昭和10年、愛媛県に生まれる。
昭和32年、愛媛大学教育学部卒業。
愛媛県立松山南高校教諭。

主要論文

「広津和郎著作目録断片」(『愛媛国文研究』第14・15号)
「真山青果と三好十郎の接点」(『日本近代文学』18輯)
「『大塩平八郎』における歴史と文学の間」(『日本文学』No. 318)



国文学研究叢書



近代日本文学の分水嶺—大正文学の可能性—

定価 2,800円

昭和57年6月20日 印刷

昭和57年6月25日 発行

著者 大西 貢

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 精文堂印刷株式会社

代表者 西村弥満治

製本所 正文社



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03) 292-3741 (代)

振替口座 東京3-4991番

©1982 Mitugi Onishi, Printed in Japan 3395-24935-8305

もくじ

I

広津和郎論序説…………… 2

II

菊池寛の作劇精神とその成立過程——『屋上の狂人』までの道程…………… 92

菊池寛の作劇精神とその崩壊過程——『閻魔堂』の改作と『父帰る』前後…………… 111

直木三十五と菊池寛の間…………… 134

久米正雄の社会劇とその構造(一)…………… 144

久米正雄の社会劇とその構造(二)…………… 164

山本有三の作劇術とその成立過程…………… 177

III

大正期教養派の成立とその挫折——安倍能成の文芸評論…………… 202

I

広津和郎論序説

1

広津和郎は、大正五年『洪水以後』の文芸時評を担当する文芸評論家として、その文学的出発をした。そして彼は、すでに七十歳の坂を過ごしていたにもかかわらず、非常にねばり強いエネルギーを持って、なお盛んに働き続けていた。その活動を記念するかの如く、昭和三十九年八月、岩波書店は、『松川事件と裁判』を出版した。それは、十四年の歳月と五度の裁判により、全員無罪の最終的判決に達した松川裁判の「全貌を伝えるため」に出版されたものであった。しかし、それまでに、彼が被告の「無実を証明するために」、膨大な『松川裁判』⁽¹⁾を書き続け、そのたくましい批評精神を、見事に結実させた事は周知の通りである。

何故、広津和郎に、あれだけの強さがあつたのか。彼の正確な批評眼と鋭い論理性、歴史に対する強い責任感、自由と人間尊重の精神、その不思議なまでの強靱さ——それらの精神が、いかにして、形成されたのか。それは、今後の重要な研究課題として、強くその検討が迫られている。

彼は、五十年という苦しい文学と歴史の道程を、時に迷い、行き詰りながら、しかし、新しく生き行く道を、試行錯誤を続けつつも発見して、彼独自の貴重な道を、しんぼう強く歩み続けて来た。彼の、長いその生涯をささえていた精神が、何であつたか、ここでは、その精神を、彼の書き続けた幾多の創作と評論を中心に、曲がりなりに辿つてみたい。

昭和三十八年の四月まで、約二年あまり雑誌『群像』に連載していた『年月のあしあと』は、彼の自伝的回想記であつた。⁽²⁾ その回想記は、ちょうど昭和三年に父の柳浪が死んだところでおちう終わっている。その昭和三年前後を見ると、その時期が、彼にとって、生涯の最も大きな混乱の時期であつた事が理解出来る。すなわち、創作の行き詰りにはじまり、出版事業の失敗による経済的破綻と困窮、『さまよへる琉球人』の投げかけた問題、宇野浩二の発狂による精神病院への入院、その後、芥川龍之介の自殺と続き、その事から受ける相当ひどい衝撃。年譜に、昭和三年の項で、「十月十五日、父柳浪を喪ふ。この世で最も親しき人を失ひ、悲しみ極まりなし」と書き、同じ四年の項で、「四十歳を前にして、今更のやうに思想の混乱に陥る」と記す。結論的に言えば、彼は、その「混乱」の中で、告白「わが心を語る」を書いて脱出し、広津和郎第二期の仕事に入つて行く。⁽³⁾

それでは、彼が、そこで言う、「思想の混乱」が、具体的には、いかなるものであり、何が原因で、その混乱に陥ったのであろうか。事実、彼をとりまく外部には、相当の事情があった。⁽⁴⁾しかし、その原因を、ただ単に外部的なものだけに求めてはならない。昭和四年六月の『改造』に、彼は、それまでの「行き詰り」と「思想の混乱」を、全部清算して、動きがとれなかった「袋小路」から脱出し、次の仕事へと移るための転換を意味する、悲痛な意図で、「わが心を語る」という告白を書いた事は前記の通りである。昭和初年という文学史的観点にたつて見れば、その告白は、ただ広津和郎だけの問題でなく、久米正雄の言葉が示すように、彼と同世代の人に、全て共通する、率直な心情を象徴的に語ったものであった。当時の彼は、自分の歩むべき道、追求しなければならないテーマを見失って、ちょうど、エアポケットに入ったような状態になっていたのではないか。その告白の中で、

「めいめいの道を歩いて行つた人々がそれぞれの行き方で皆くたくたに疲れ切つてゐる」「われわれが青年時代から学んだもの、知つたもの、それはみんな欧州文明の行き詰りそのものだった」「学べば学ぶ程、それは今から思えば悪かつたわけである。知れば知る程、今から思へば行き詰りの度を強めたわけである」「正直にいつて、私の心は今その疲労と洗つても洗つても洗ひ落ちて行かない過去の汚染とに悩んでゐる。」

と彼は述べる。

それでは、何故、彼が行き詰らなければならなかったのか。そこで、その原因を追求し、その行き

詰りを、彼がいかに打開して進んで行ったか、その方法を検討してみたい。⁽⁵⁾

2

広津和郎が、文学活動をするに至るまでの何年間か、彼のたどった精神の形成過程で、看過する事の出来ないものに、父柳浪の強い影響があった。それは、『変目伝』の序⁽⁶⁾をはじめ、「父の死」「愛と死と」「若き日」そして『年月のあしあと』など一連の作品に克明に記される。⁽⁶⁾ 彼が、父に対して寄せた愛情の深さには、普通の「父と子」という観念だけでは、到底理解することの出来ないものがあつた。彼の少年時代から、精神の形成期にかけて、彼を、何より苦しめたのは、自己嫌悪と不眠症であつた。しかし、不思議な事は、彼が、絶えず病弱と神経症の連続であつたにもかかわらず、その反面、健康で明るい性格を持つ事であつた。それは、彼の精神内部に、「自由」と「責任」の観念が同居している事や、「彼等は常に存在す」を書いた同じ月に、「怒れるトルストイ」を書き、『やもり』を書いた同じ月に、『悔』(のち改作して『若き日』と改題)を書くという、彼の精神構造を理解する時、解決するための何か手がかりになるのではないかと思ふ。⁽⁷⁾

彼が、「父の死」「愛と死と」「若き日」などに、當時を思い出している事をパラフレイズすると、彼が中学を卒業しかける頃には、ちょうど文壇の柳浪の時代が去っていた。文学史的に見て、明治四十年前後は、自然主義の全盛時代である。明治四十一年に書いた『心の火』あたりを最後に、柳浪は

創作的興味を消失し、厭世的傾向を次第に強めて行った。⁽⁸⁾ そうしている間に必然的な結果として、生活がいよいよ「どんづまり」になって来る。だから、その当時、彼等の一家は度々転居せざるを得なかった。次第に家の中から、めぼしい物がなくなり、母の簞笥は空になった。そして、夜が更けてから近所の眼を避けながら、顔を知られていない遠い町まで、米の一升買いにも行かなければならない状態が続いた。しかし、柳浪は、自分の時代が去った事を自覚し、世の中と妥協して通俗向きの作品を書き、芸術を生活のための「方便」とするような態度を採らなかった。それと同時に、『変目伝』の作者には、彼の芸術観からして、通俗向きのものは技術的に書けないし、芸術を生活の手段とする事は、到底出来なかったのだと考えられる。だから、柳浪にとって、生活の不如意にも芸術の行き詰りにも、その他いっさいの苦しみに対して、ただ黙々と「堪えるという事」以外に方法がなかった。柳浪の姿は、異常なものとして私達の目に映る。広津和郎は、「父の死」の中で、柳浪の姿をこう描写する。

父は黙々として何も云わなかった。部屋の障子を緑色の布で蔽い、薄暗い中に、朝から晩まで黙って坐っていた。父は六年か七年かそうして人にも会わず引籠っていた。

それと同じ事は、『若き日』の中にも出て来る。その一種、瘦我慢とも考えられる「現実無視」の態度を、「父の信念」によるものと広津和郎は解釈した。そして柳浪の現実無視の態度は、考えようによれば、「無用者」の姿でもあった。⁽⁹⁾ しかし、父柳浪に対する意識には、次に記すような不思議な

までの愛情があり、その観念は、後に重要な役割を果たす、「自由と責任とについての考察」の「責任」の体系と、「散文精神について」で圧縮される「散文精神」の体系などの発育史上、その精神形成をなすための、萌芽となるのではないか。⁽¹⁰⁾たとえば、彼は「愛と死と」の中で、次のように書く。

「父が物を書かなくなり出してから一家が襲われ始めた生活難というものを、心から苦しいと思った事は一度もなかった。いろいろな不自由に、父に対する尊敬から不平不満を抱いた事は全然なかった。物質的な不如意が精神的に私を苦しめようなどとは考えて見た事もなかった」「父には堪えられない事も自分には堪えられる」「私は家族達を見送るまではどんな事でもして生きている事でもして働こうと思っていた」「生きている間はどんな事でも見て耐えて行かなければならないという事が、私の心では一つのモラルになっているのである」

右の文を、彼が書いたのは、昭和十四年であった。それまでも、彼は同じような事を書いている。すなわち「父の死」で、それを書いたのは、昭和五年であったが、その中に記している、次の文章と照応させてみると、彼の責任観がいかにして形成され、確立されたか、その「モラル」と共に一層明確になる。それは、彼が、『死児を抱いて』を書いていた時の事である。肺炎で四十度の高熱に呻吟していた彼は、口からも鼻からもどんどん血が溢れ、咳をする度に、肺から血が込み上げて来た。彼は、生と死という極限の状況にある。その時、彼は何を考えたか、次のように記す。

私は唯昏々と眠り始めた。時々気がつくとき「自分はこのまま死ぬのかな」という考えが浮んで

来た。口から知らぬ間に流れ出る血が、枕覆をべとべとにした。その三四年前に死んだ私が後取りになつてゐる伯父の顔が無暗に浮んで来た。それで益々「死ぬのかな」と思った。

けれども「死ぬ」と思うと、頭に来るのは父だった。「自分が死んだら、父がどうなるだろう」と思った。(略)

私は自分だけなら死んでもいいような気がしていた。(略)

「死んで堪るものか。屹度生きて見せる」という、がむしゃらな強い気持が、私の心に湧き起つて来た。「屹度生きてやる、屹度生きてやる」

彼は、熱に浮かされながら、頭に感じたその時の様子を、右のように描写する。しかし、彼の右の文章を讀んでいて、生死の境をさまよう人間の心境としては、何か切実さが迫つて来ない。父のために、死んではたまらないと考えている。それは、事実であつたかもしれない。だが藤村の、「自分のようなものでもどうかして生きたい」という発想法とは根本的に違ふ⁽¹¹⁾。そこに、広津和郎の父に対する尊敬と愛情の特殊な形態があるのかもしれない。その時、彼が考えた事のうち、注目すべきものも一つある。その事も、彼の思考態度を検討する際、何かの手がかりになり得る。「死んで堪るものか。屹度生きて見せる」と考えながら、彼は徳富蘆花の『青蘆集』にある、石垣を書いた作品を思ひ出す。

石垣の一つ一つの石が自分の存在を無意味に感じて、それは他を活かすために役立っている。

だから、どんなに苦しくても、他のために生きなければならない。

そこに、広津和郎の自分の身を捨て、犠牲的精神がいかになく出ている。柳浪の生活態度は、前に述べた通りである。結局、父と母、それに、自分の生活をささえて行く者は、自分以外にはないのだと考えなければならなくなる。勿論、彼には、ただ一人の兄がいた。しかし、その兄が、決して頼りになるものでなく、『年月のあしあと』をはじめ、各種の作品に度々記している如く、反対に彼等の生活をおびやかし、苦しめるものであった。そして、「他のために生きなければならない」という生活意識が、次第に彼の精神内部を統一する「モラル」として結晶するのである。

柳浪との関係を考察する際、疑問に思うのは、何故、あれ程までに、広津和郎が父に愛情を持ち、尊敬しなければならなかったか、という事である。それを、彼は、何ら明確に説明していない。たとえば、「父の死」の中に書いている、次の言葉を読んでも、愛情を感じるようになったその理由が稀薄である。

「私が父を益々愛するようになったのは、その頃の父の憂鬱と孤独と貧乏とのためだったと思う。父は時代の変り目について何も云わなかった。父は不平や不満があったに違いないけれども、そういう事を口にするのは嫌いらしかった」「私は黙々としている父を益々敬愛し、貧乏なんか何でもないという心持になって行った」

と言う。「父の死」という文章が、ともかく随想だという性格にもよるが、これだけでは、いくら読

みかえしてみても、彼が父を敬愛するに至った理由の説明にはなっていない。その事は、もっと別の場所でも同じである。次に、『若き日』の中に描いた父と彼の関係を見ると、生活がいかに逼迫して来ても、それに対して、家長としての弁解や泣言をいわず、じっと押し黙って忍耐している姿を描写し、「それも同じ父の信念による」のだと考え、また、「生活なんか何でもない、やり通せば好いのだ」という父の考え方を、その実例として、そのまま彼に示してくれる父に対し、

私はその点で父に感謝し、父を尊敬している。

と述べる。しかし、『若き日』の場面も、やはり同様に説得力がない。ただその次にある、柳浪が口でこそ言わないが、こうして悲鳴をあげず、不如意の中で、忍耐しているのは、何といっても並大抵でない瘦我慢に違いなかった、と彼が考え、

その瘦我慢から父を解放して少しでものんびりさせたい。それは私の父に対する子供としての愛情からばかりいうのではなく、明治の文壇に相当の仕事をした作家の晩年としても当然の事ではないからならぬ。

という理由を注意して見る必要がある。同じ、『若き日』の中で、彼は、「父に対して絶対的な是認を持っていた」とも記す。明治の文壇で、柳浪が果たした役割とその芸術的価値を、彼がいかに評価していたかは、『変目伝』の序に詳しい。柳浪が、芸術家としての素質を持ちながら、結局、臆病で自分に自信が持てず、次第に創作が出来なくなる過程、それに、作品を年代順に見て行って受ける感

じ、それと父の実際の生活の歩みを追って見て受けた感じ、その間には、看過する事の出来ない矛盾があった事を述べ、柳浪の作品が、暗いものばかりを描いているにもかかわらず、柳浪の求めていた精神の基調には、別のものがあつた事を説明し、「父は明るみを望み、幸福を望み、人生の美しさを絶えず目蒐けた。父の希望している方向はいつでも変りがなかつた。」と書いている。だから、柳浪は、息子に対して暗いものは読ませたくなかつた。そうかと言って、明るいものが描ける性格ではなかつた。「子供の事を思ふと、もう思い切つた事が書けない」と言つた父の挿話を記し、「此言葉は云ひやうのない苦しみを以て私の胸を掻きむしる」と書く。そこに、彼が柳浪に対していただいた、尊敬と愛情の理由があるのかもしれない。

広津和郎が、父柳浪から教えられた事は、まず「後を見ずに、真直ぐばかり向いてぐんぐん進んで行く方が作者はのびる」「人間は自惚れが強く、傲慢である方がいい。」という事であつた。⁽¹²⁾しかし、その教訓が、どれだけ作品の中で生かされたか、反対に、その教訓とは、違つた結果を生むに至る。つまり、柳浪が、創作に興味と自信を失つたと同じように、広津和郎も文字通り「袋小路」に迷い込んでしまふのである。⁽¹³⁾

次に、彼は、『若き日』の前身『悔』の中で、彼自身と想像される人物「私」について、「私は一方に於いては、始終自分でも困るほどの意地っぱりで強情であつた。が、又他の一方に於いては、非常に弱い精神を持っていた」と説明する。彼は、その「私」が、「千鶴子」と恋愛をしながら、それと

同時に、結婚する事を恐れるという場面をそこに設定し、結婚を恐れる「最大の理由は、如何にして生活したらいいかという事であった」と説明する。そして、「私」は「千鶴子」から遠ざかる。作者は、千鶴子に、別の男と不幸な結婚をさせた後、死なせている。しかし、最後のところで、結婚にまで進まなかった「根本の原因は、やはり私の心持に、女性に対するほんたうの尊重がなかったがため」と記し、また「私の女性に対する尊重の不足は、その後の生活に於いて、私を不幸に導いた」、「女性に対するほんたうの尊重は、結局自己を尊重する事になり、女性に対する軽視は、結局自己を軽視する事になると云ふ事をさとしたのである」と述べる。ここで、『やもり』『波の上』など、一連の作品を想起する必要がある。『悔』が改作され『若き日』と改題された時、作者は、その最後の部分を削って別の文章を添えた。それと『若き日』の中には、嘗ての『悔』にはなかった、次の言葉が入る。すなわち、

私は後に武者小路実篤の『お目出度き人』や志賀直哉の『大津順吉』を読んで、白樺の人達のこと、こういう問題にぶつかった時の一途さに驚嘆した。そして彼等の場合と自分の場合とを比較して見て、生活の不安という事が本来なら感じないで済むような複雑な屈託を青年の心に与えるものだという事を改めて考えた。

と言う。そこには、広津和郎の精神をどこまでも支配せずにおれぬ、「生活の不安」があった事を理解する事が出来る。尊敬と愛情を持つ父には、あくまで潔癖さを保たせ、世間と妥協させたり、時代の

流れに迎合させたくない、そうする事が、芸術家としての父に、最期を飾らせるのにふさわしい事だ
と思う。それ故、広津和郎が、文壇から引退している柳浪に、生活と現実を無視させる以上、必然的
な結果として、彼が生活を捨てる訳には行かなくなるのであった。そのような状況の中で、広津和郎
は、次第に生活をささえて行くべき「責任」を感じなければならなくなっていった。そして、生活を
支えるために、責任を持たなければならなかった彼の精神内部では、実生活の重圧から解放されて、
自由になりたいという願望と、責任を何処までも背負わなければならないという観念が、複雑に交錯
していたのである。後に彼が、「散文精神」を説明して、それを、「どんな事があってもめげずに、忍
耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、楽観もせず、生き通して行く精神」と述べる時、父柳浪の
晩年を、自然に想起せずにはおれないのである。「自由と責任についての考察」と「散文精神につ
いて」をあわせ考えてみると、彼の生涯を支えていたものが何であるか、その説明がつくであろう。
その両方は、良きにつけ悪しきにつけ、父柳浪から受け継いだものに相違ない。しかし、その「散文
精神」が、内部的に確立するまでには、幾多の苦難な歴史の波をくぐらなければならなかった。

3

広津和郎の精神を考察するとき、その形成過程において、自然主義の作品とロシア文学との影響が
あった事を看過してはならない。彼は、中学の四年頃から文学に対する興味を持ち、特に自然主義の